

発刊にあたって

生命の星・地球博物館館長 濱田隆士

横浜馬車道にあった神奈川県立博物館が、歴史と自然の二つの館に生まれ変わりました。生命の星・地球博物館は3月20日、小田原市入生田に約42,000平方メートルの敷地を使い、地下1階地上4階、延面積19,000平方メートルの規模でのスタートです。

日本は今、博物館・水族館ブームといえるくらい、次々に新しい施設が誕生するなか、従来の実績をふまえ、かつ現代性を十二分にとり入れた、コンセプトのある新しい顔を造り出したのが、この生命の星・地球博物館です。名前もユニークですが、展示にもさまざまな新企画・新方針が採り入れられています。

博物館というと、何となくカビくさく薄暗い部屋に、古びた標本が並べられて、とってこられた方も少なくないでしょ。しかし、今はそうではないのです。広くて、明るく、写真撮影も、標本に手を触れるのも自由、という全く別の世界が拓かれています。

博物館にはさまざまなスタイルと規

模があり、それぞれに特徴を競うのが好ましい在り方といえます。ふつう館には、これ、という“目玉”展示物があり、それを軸にPRが展開され、人気も出てくるわけです。しかし、ここ生命の星・地球博物館では、実はその目玉というものを選んでいません。来館された方の一人一人が、それぞれに「アッ、これはすごい!」とか、「ウワッー びっくりした」など思い思いに強く印象づけられたもの、それこそが目玉だろうと解釈しているのです。

エントランスホールでは、恐竜時代の中・陸上・大空に君臨した古生物の骨格標本がお出迎えし、4階分吹き抜けの地球・生命の大展示室から、3階へ上がって神奈川の自然・自然との共生、さらにジャンボブック展示室へと続きます。エントランスと同じ無料ゾーンのミュージアムシアターもまた楽しい所です。

博物館には学習と娯楽両方の要素が期待されるので、エデュテインメント(楽修とでも訳しましょう)なる新語



濱田隆士館長。

に相応しく、ミュージアムライブラリーでコンピュータ検索を楽しむこともできます。生徒さん用に、実習実験室も用意しました。

このコミュニケーション誌は、このような新しい館のさまざまな表情をお伝えし、できるだけ多くの方々に近代総合自然博物館の歩む方向をご理解いただけるよう、楽しい情報を満載・発信していきたいと思っています。

